

# 『ヴェニスの商人』における異文化コンフリクトとその「解決」 ——シェイクスピアと異文化コミュニケーション：その1——

浜 名 恵 美

## 1. 序論

### 1. 本論の目的

「シェイクスピアと異文化コミュニケーション：序説」(『筑波英学展望』第22号、2003年3月、pp. 71-83)で、異文化コミュニケーション研究を概説し、シェイクスピアと異文化コミュニケーションの接合のさまざまな意義と可能性等について論じた。そうした意義のひとつとして、「異文化コミュニケーション研究は、特に台詞の多角的な分析に有益なツールを提供する。革新的または転倒的な読みは必ずしも期待できないかもしれないが、従来とは異なる読みや既成の読みをさらに掘り下げたり拡張する読みが生まれる可能性は大きい」(p.78)と指摘した。本論の主要目的は、シェイクスピアの『ヴェニスの商人(*The Merchant of Venice*)』(推定執筆年1596-97年)を対象とし、異文化コミュニケーションの理論と方法(実践)の分析のツールとしての有効性を実証することである。本論では、異文化コミュニケーション研究のなかで最重要な分野のひとつ、コンフリクト管理・解決の基本的理論をとりあげる。

### 2. 異文化コンフリクト管理・解決理論の動向

異文化コミュニケーション研究と密接に関わるコンフリクト解決は、「第二次大戦後に学問として出現したので、比較的若い」分野である。コンフリクトは、多種多様な領域——「政治、学校、家庭、病院、法廷、寝室で、高速道路で、またその他の場所」——で起こる。したがって、コンフリクト解決は、「建設的なコンフリクト管理」に関心のある広い多様な集団に——「心理学、教育、社会学、政治学、ビジネス、国際関係、法律、ソーシャル・ワーク、健康管理(ヘルス・ケア)」などに関わる大学や大学院の教員にも学生にも——有益である。その理論と実践がめざすのは、「どれほど難しくても、コンフリクトに

協調的な、双方に満足のいく(win-win)解決を見出す」ことである<sup>1</sup>。

ところで、日本の異文化教育にコンフリクト解決(conflict resolution)の導入を提唱する鈴木有香が指摘しているように、コンフリクト解決は、日本では心理学、法曹界、ビジネスなどの各専門分野で多様な訳語が使用され、定訳がない状態である。コンフリクトには、「葛藤」、「紛争」、「衝突」、「意見の食い違い」(その他、「対立」、「軋轢」、「摩擦」)などの訳語がある。「コンフリクト」は欧米でも一般に否定的にとらえられる傾向があり、日本語のどの訳語でも否定的なものに見える。しかし、コンフリクト解決研究の分野では、コンフリクトが積極的な機能をもっていることが力説されている。「コンフリクトの肯定的側面に着目し、問題はコンフリクトそのものでなく、人々がコンフリクトにどのように対処するかということが重要」なのであり、「コンフリクト解決過程の中で、人間関係の相互理解を深めたり、新しいものを産み出す契機となる」といった肯定的な側面が重要視されている<sup>2</sup>。協調的(collaborative)交渉と競合的(competitive)交渉の定式化を始めとするコンフリクト解決モデル(Coleman-Raider Model)を作ったことで著名なコールマンとレイダーは、「扱いさえ間違わなければ、コンフリクトというのは物事の沈滞化を防ぎ、人の興味、関心を引き起こし、問題点を浮き彫りにし、その結果、個人あるいは社会の変化、成長を生み出すための手段、方法となりうる」、と指摘している<sup>3</sup>。

なお、鈴木氏は、“resolution”という術語については、「解決」という訳語でほぼよいと考えているようだし、コンフリクトに比べれば翻訳上の困難は小さいのだが、「解決」(または「解消」)という訳語がいつも適切とは言えない。

<sup>1</sup> Morton Deutsch and Peter T. Coleman, eds., *The Handbook of Conflict Resolution: Theory and Practice* (San Francisco: Jossey-Bass Publishers, 2000) xi-xiii 参照。Morton Deutsch は、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの国際紛争解決研究センター(International Center for Cooperation and Conflict Resolution, 略号 ICCCR)の名誉所長で、この分野のパイオニア。Peter T. Coleman は ICCCR 現所長。

<sup>2</sup> 鈴木有香、「異文化教育へのコンフリクト・リゾリューションの導入について——協調的交渉と異文化教育の関連性」、『異文化コミュニケーション No. 6』(2003年): 201-16, esp.202-204 参照。ちなみに、鈴木は、欧米の諸理論や教育プログラムは、日本の教育に導入する場合、修正が必要であると指摘している。

<sup>3</sup> エレン・レイダー、スーザン・W・コールマン著、日本語版監修・訳 野沢聡子『国際紛争から家庭問題まで 協調的交渉術のすすめ』(アルク、1999) 8。原著は、Ellen Raider and S. W. Coleman, *Conflict Resolution: Strategies for Collaborative Problem-Solving* (Brooklyn: Ellen Raider International and Coleman Group International, 1992)。レイダーは、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの国際紛争解決研究センターの紛争解決、交渉術、調停スキルのトレーニング部門設立に貢献。

“resolution”には、複雑にからまった問題を「分解」、「分析」、複雑な問題の「解明」、紛争の「調停解決」などの意味もある。いずれも基本的に積極的な意味に見えるが、紛争の当事者同士が調停解決を本当に互いに満足して受け入れたのかどうかは、さらに検討されねばならないことも多いだろう。皮肉にも、「紛争」、「葛藤」など“conflict”の日本語訳は否定的な側面が強調されすぎ、「解決」という“resolution”の日本語訳はあまりにも肯定的な側面が強調されすぎるように思われる。

コンフリクト解決では、“management”という術語もよく使われる。“resolution”と“management”の術語の両方が必要なときもあれば、二つの術語に事実上ほとんど区別がつけられないときもある。元来、コンフリクト解決の理論と実践は、「コンフリクトを建設的に manage する」ことをめざしている。コンフリクトの当事者双方に満足のいく解決を最大限にめざすが、現実には、双方がいかに協調的に交渉し（話し合い）、妥協するか、折り合いをつけるかということであり、双方にとって 100 %満足のいく解決とか、コンフリクトの全面的解消はほとんどありえないと言ってよいだろう。

このような事情なので、本論では、“conflict”はそのままカタカナでコンフリクトと表記し、“resolution”に関しては、基本的に解決という訳語を使うが、その解決に対して特に疑義がある場合は括弧つきで「解決」と訳すことにする。同様に、“manage”と“management”も日本語に訳しにくいのが、これらは、「管理（する）」を基本訳としつつ、適宜、「処理（する）」、「対処（する）」などと訳すことにする。

ここでコンフリクト管理・解決の専門家たちが前提としていることを要約しておこう。

- 1) コンフリクトは常にどこでも起こりうる。
- 2) コンフリクトは積極的な作用を果たしうる。
- 3) 今後の多文化世界では、コンフリクトの管理・解決能力がますます必要とされる。

コンフリクト管理・解決能力を身につけるためには、知識と技術を習得し、多様な経験——現実の異文化接触の経験、ワークショップ、シミュレーション、文学や芸術作品を通しての疑似体験——を積み重ね、知性、感受性、寛容の精神、表現力、柔軟性、創造力を高めることが求められる。要するに、高度の異文化コミュニケーション能力を身につけることが求められる。

コンフリクト管理・解決には多数の理論モデルおよび特にアメリカでは子供

向けから大人向けの教材までがあるが、本論では、ステラ・ティン・トゥーミー (Ting-Toomey) とジョン・G. オーツェル (John G. Oetzel) が、*Managing Intercultural Conflict Effectively* (2001) で提唱している「文化に基づいた状況モデル (culture-based situational model)」を主に参照する。ティン・トゥーミーは、「コンフリクト面子交渉理論 (conflict face-negotiation theory)」の創始者として著名な中国系アメリカ人の異文化コミュニケーション学者であるが、この本では組織コミュニケーションに詳しいオーツェルと共同で、彼女自身の諸理論と他の多数の学者による理論を総合して、「文化に基づいた状況モデル」(発展中) を構築しているので、このモデルが現時点では最も信頼できる理論のひとつであるように思われる。書名からわかるように、コンフリクト解決よりはコンフリクト管理とそのために必要な異文化コミュニケーション教育により関わっている。

本論は、シェイクスピアの芝居中の異文化コンフリクトを検討する。芝居には結末があり、めでたい和解であれ最悪の解決 (死) であれ、コンフリクトは「解決」される。ベケットなどの反演劇は例外として、シェイクスピアの芝居を含めた西洋演劇のアクションにとって、コンフリクトは必須要素である。劇作術とは、多種多様なコンフリクトを考案し、管理し、「解決」することだと言える。こうした解決の意味を見直すことは重要であるが、コンフリクトの過程を見直すことも重要である。したがって、コンフリクトの解決に劣らずその過程を特に文化の諸特徴に焦点を合わせて多角的に分析するためには、「文化に基づいた状況モデル」<sup>4</sup> が適していると言える。

## II. 本論

### 1. 『ヴェニスの商人』における異文化コンフリクトについて

『ヴェニスの商人 (副題: ヴェニスのユダヤ人)』は、シェイクスピアの全作品中でも、屈指の異文化演劇 (intercultural theater/play) である。この作品に描かれている当時のヴェニス、国際商業都市国家であり、ヨーロッパ各地やアフリカを含めた地中海沿岸諸国からも、王侯貴族、商人、船乗りなどが往来していた。この作品の中で慈悲を説いて翻意を迫るキリスト教徒に対し、シャ

<sup>4</sup> Stella Ting-Toomey and John G. Oetzel, *Managing Intercultural Conflict Effectively* (Thousand Oaks, CA: Sage, 2001) 28. なお、この本は学部の教科書としても書かれているので、高度の専門的議論や論争にたちいらず、専門用語もできる限り使わず、平易に記述されている。

イロクが、彼らが支配する社会にユダヤ人差別があるだけでなく奴隷がいることを痛烈に皮肉っているように、すでに各地から連れてこられた何百人もの奴隷（スラヴ人、タタール人、ムーア人、アフリカ人）<sup>5</sup>もいた。

シェイクスピア自身は生涯外国に行かなかったと推測されているが、さまざまな材源——主材源と推定される 14 世紀イタリアの物語集でジョヴァンニ・フィオレンティーノ作『イル・ペコロネ（馬鹿者）』から、作品中で主人公バラバスに言及されている同時代の劇作家クリストファー・マーローの劇『マルタ島のユダヤ人』まで——などから情報やヒントを得て、異文化の人々や習慣を舞台化したり、台詞の中で言及したりしている。『ヴェニスの商人』の「箱選び」のプロットでは、ポーシャにとっての異邦人の求婚者たち——以前にやってきたナポリの公爵、パラティン伯爵、フランスの貴族ル・ボン、イングランドのフォークンブリッジ男爵、スコットランドの貴族、ドイツのサクソニー公の甥（1 幕 2 場）、実際に舞台に登場して箱選びをするモロッコの大公（2 幕 1 場、2 幕 7 場）とアラゴンの大公（2 幕 9 場）——が、それぞれ彼女の「自民族中心主義 (ethnocentrism)」<sup>6</sup> の立場から、ステレオタイプな評価を下され、侮蔑されたり、風刺されたりしている。ヴェニスの公爵も、異教徒のトルコ人やタタール（ダッタン）人などを引き合いに出して、侮蔑的に述べている（4 幕 1 場 32 行）。作品全体の随所で、白人キリスト教徒たちは、ユダヤ人を「悪魔」や「犬」と呼び、露骨に侮蔑している。当時、ヨーロッパの現実の社会に宗教的・民族的偏見があり差別が行われていたので、舞台上でもそうした見方や態度が表現されていること自体はいまさら驚くべきことではない。ここで確認しておきたいのは、この作品には、異文化への「偏見 (prejudice)」<sup>7</sup>

<sup>5</sup> William Shakespeare, *The Merchant of Venice*, ed. M. M. Mahood (Cambridge: Cambridge UP, 1987) 138, n90. 本論を通して、作品からの引用はこのテキストを使用する。

<sup>6</sup> “ethnocentrism” は、「自文化優位主義」とも訳される。その方が適切な場合も多いが、本論では原語に外見上忠実な「自民族中心主義」という訳語を主に使うことにする。

<sup>7</sup> 本論では、“prejudice” を留保付きで「偏見」と訳しておく。コンフリクトは積極的な作用をしようと指摘したが、異文化コミュニケーション学では“prejudice”も「積極的な機能」があるとされる。日本語で「偏見」と訳すと、まったく否定的な概念に見えるが、語源的には、類義語の“preconception”と同様に、「先入観」、「予見」という意味であり、先入観や予見が正しい場合もある。より意義深いのは、異文化の人と接触するとき、無知であるよりは、たとえ正確でなくとも何らかの予備知識や情報を得た方が、初期段階では効果的なコミュニケーションが期待できるとされるのである。ただし、残念ながら、先入観や予見がまちがっていても、一度学習してしまったものを正すことはたいてい難しく、永続しがちである。Gudykunst and Kim, *Communicating with Strangers: An Approach to Intercultural Communication* (4th ed.; Boston: McGraw Hill, 2002)

が多数表象されており、顕在的または潜在的な多数の異文化コンフリクトを見出すことができることである。

『ヴェニスの商人』に表象されている多数の異文化コンフリクトの中で、最も重要なものは、主題役アントーニオと敵役シャイロックの間に起こる生命に関わる深刻なものと、ポーシャとバッサーニオ、ネリッサとグラシアーノという二組の新婚夫婦間の指輪をめぐる愉快的なものである。宗教的・民族的なコンフリクトと、ジェンダーのコンフリクトである。本論では、これら二つの中で、前者のコンフリクトをとりあげる。

## 2. アントーニオとシャイロックの異文化コンフリクトの特色

### 1) 二人の異文化ダイアログの概観

本論の2)で、アントーニオとシャイロックのコンフリクトを、「文化に基づいた状況モデル」に準拠して分析する。このモデルで分析される要因や特徴が多いので、判断の根拠となる台詞をいちいち入れると、重複したり煩雑になったりする恐れがある。したがって、特に必要がある場合を除いて、判断の根拠となる台詞あるいは説明は入れない方針をとる。そこで、ここで二人の対話（一部に傍白、別の登場人物への台詞を含む）の重要な部分を概観しておく。裁判官バルサザー（男装のポーシャ）による判決とその後の「解決」は、3)で別に扱うので、アントーニオとシャイロックのコンフリクトに関しては、ここでは判決の直前まで（4幕1場294行まで）をとりあげる。

『ヴェニスの商人』の中で、アントーニオとシャイロックが直接対話する場面は多くない。しかし、1幕で両者の相互の憎悪は強烈に示されている。1幕3場でシャイロックは、アントーニオを保証人として、バッサーニオに大金を貸すことに同意してから、次のように傍白している。

How like a fawning publican he looks!  
I hate him for he is a Christian;  
But more, for that in low simplicity  
He lends out money gratis, and brings down  
The rate of usance here with us in Venice.  
If I can catch him once upon the hip,

I will feed fat the ancient grudge I bear him.  
 He hates our sacred nation, and he rails  
 Even there where merchants must do congregate  
 On me, my bargains, and my well-won thrift  
 Which he calls interest. Cursed be my tribe  
 If I forgive him! (1.3.33-44)

(あいつは、ごますりの収税吏みたいだ。／おれはあいつが大嫌いだ、キリスト教徒だからだ。／だがもっと気に食わないのは、謙遜ぶって／ただで金を貸し、ヴェニスのおれたち金貸しの／金利をひきさげていることだ。／あいつの弱みを握ったら／積年の恨みをたっぷりとはらしてやる。／あいつはおれたち神に選ばれたユダヤ人を憎んでいる。そして／大勢の商人たちが集まっているところでも／おれを、おれの商売を、それにおれがりっぱにかせいだ金を／高利と呼んでののしる。そのあいつをおれが許すなら、／ユダヤ人は呪われるがいい！)

シャイロックとアントーニオは、宗教・民族・職業（商習慣）の違いを主要原因として深刻に対立し、互いに憎悪しあうのである。

1 幕 3 場では二人が深刻な対話を展開する。(シャイロックの台詞の方が多い。これは、被差別集団の一員でも、現金所有の点で、無一文のバッサニーオはもちろん、金持ちでも現金の手持ちのないアントーニオより優位にたち、日頃の恨みと怒りを晴らす絶好の機会を得たので当然とも言える。) シャイロックの皮肉たっぷりの台詞に対し、アントーニオは忌憚なく応酬する。

I am as like to call thee so again,  
 To spit on thee again, to spurn thee too.  
 If thou wilt lend this money, lend it not  
 As to thy friends, for when did friendship take  
 A breed for barren metal of his friend?  
 But lend it rather to thine enemy,  
 Who if he break, thou mayst with better face  
 Exact the penalty. (1.3. 122-29)

(おれはまたおまえを犬と呼ぶだろう、／唾をはきかけ、足蹴にもするだろう。／おまえが金を貸すというなら、おまえの友人に貸すと思うな、／友情

が子を生まぬはずの金を友人に貸して／利息をとるはずがないではないか。  
／それよりその金をおまえの敵に貸すと思え、／そうすれば契約を破られた  
とき、大きな顔で／違約金をとれるだろう。)

その後、シャイロックが、無利子で 3000 ダカットを貸す代わりに、「冗談」  
だと言って、3 か月以内に返済できない場合には、彼の身体からシャイロック  
が望む部分の肉 1 ポンドを切りとってよいという証文を要求すると、アントー  
ニオは気楽に同意する。

3 幕 1 場では、二人の対話は行われないが、アントニーオの船がすべて難破  
したという知らせが届く。アントーニオとバッサーニオの友人、サレーニオと  
サリーリオが、まさか証文どおりに肉を切りとりはしないだろう、何の役にも  
たたないのだからと述べる。すると、シャイロックは激烈に応答する。

To bait fish withal; if it will feed nothing else, it will feed my revenge. He hath  
disgraced me, … scorned my nation …— and what's his reason? I am a Jew.  
Hath not a Jew eyes? Hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses,  
affections, passions? … And if you wrong us, shall we not revenge? If we are  
like you in the rest, we will resemble you in that. If a Jew wrong a Christian,  
what is his humility? Revenge. If a Christian wrong a Jew, what should his  
sufferance be by Christian example? Why revenge! (3.1.42-55)

(魚釣りの餌にはなる。腹のたしにはならなくても、おれの復讐心は満たし  
てくれる。あいつはおれに恥をかかせた…おれの民族を軽蔑した——あいつ  
がそうするのは、なぜだ? おれがユダヤ人だからだ。ユダヤ人には目がな  
いか? 手、五臓六腑、四肢が、感覚、感情、情熱がないというのか? …そ  
して、おれたちがひどいめに会っても、復讐してはいけないのか? ほかの  
点があんたらと同じなら、この点だって同じだろう。かりにユダヤ人がキリ  
スト教徒をひどいめに会わせたら、そいつの忍従の道とはなんだ? 復讐だ。  
キリスト教徒がユダヤ人をひどいめに会わせたら、忍従とはキリスト教徒の  
手本に従えば、なんだ? もちろん、復讐だ!)

3 幕 3 場では、バッサーニオがベルモントでポーシャを射とめている間に、ア  
ントーニオの方は、返済期限が来ても借金を返済できなかったため、シャイロ  
ックに訴えられ、牢に入れられている。ここでは非常に短い時間、アントーニ



オとシャイロックが対話をしている。アントーニオは、シャイロックと交渉しようとするが、シャイロックが拒絶する。しかも、アントーニオは、相手の憎悪を知るがゆえに、すぐあきらめてしまう。

この芝居の山場である4幕1場は、ヴェニスの法廷であり、原告のシャイロック、被告のアントーニオ、公爵、裁判官、その他の人物たちが登場する。アントーニオは覚悟を決めている。公爵が、抵当の取立て請求をとりさげるように示唆するが、シャイロックは抗弁する。

I have possessed your grace of what I purpose,  
And by our holy Sabaoth have I sworn  
To have the due and forfeit of my bond.

.....

You'll ask me why I rather choose to have  
A weight of carrion flesh than to receive  
Three thousand ducats .....

.....

So can I give no reason, nor I will not,  
More than a lodged hate and a certain loathing  
I bear Antonio, that I follow thus  
A losing suit against him. (4.1.35-62)

(私の意向はすでに公爵に申しあげましたし、／私たちの聖安息日にかけて、  
／証文どおりの抵当をもらおうと誓いました。／(中略)／理由を言えとおっしゃいますか、なぜ私が／三千ダカットを受けとらずに一ポンドの／腐れ肉を欲しがるか？(中略)／理由はないし、あつたとしても言うつもりありません、／私がアントーニオに抱いている宿怨と嫌悪、／そのために損する訴訟をしているのだとしか／言いようがない。)

断固として請求をとりさげないシャイロックに対し、バッサーニオが介入して、口論になる。アントーニオがバッサーニオをなだめる。

I pray you think you question with the Jew.

.....

You may as well do anything most hard

As seek to soften that-than which what's harder?—

His Jewish heart. (4.1. 70-80)

(いいか、きみはユダヤ人と議論をしているのだ。／(中略)／どんなに難しいことでもやるほうがましだろう／あいつの固い——あれより固いものはあるまい——／ユダヤ人の心をやわらげようとするぐらいなら。)

アントーニオは、ユダヤ人を自分たちとはまったく異質の者、キリスト教徒には理解不能な存在として、位置づけるのである。

## 2) 二人の異文化コンフリクト分析 (文化に基づく状況コンフリクト・モデルに準拠)

ここでは、異文化コンフリクト理論を用いて、『ヴェニス商人』のアントーニオとシャイロックの対立を分析するが、その前に断らねばならないことがある。第一に、現実の人間ではなく、芝居の登場人物がおこなうコミュニケーションの比較なので、いわゆる心理的リアリズムの弊に陥らないように、合理的に妥当な範囲内で行う。すなわち、分析者の主観的な判断や推測はできるだけ避け、作品そのもののから判断できないことはむりにとりあげない。第二に、この作品は初期近代に時代設定されているので、ヨーロッパといえども、顕著な階級・身分社会であり、近代以後の民主的社会や水平的な人間関係の表現を期待することはあまりできない。異文化コンフリクト管理・解決モデルは、現代の文化とコミュニケーションを対象としており、このモデルをシェイクスピアの作品に適用することは、時代錯誤になりかねない。その危険性は十分認識しつつ、これも妥当な範囲内で慎重に適用することにする。とはいえ、現代でも階級や身分等の格差は存続しており、基本的に現代のモデルを柔軟に適用することができるので、特に必要がない限り、シェイクスピア研究の立場から歴史的条件や状況についての解説などを省略する方針をとる。

本論が準拠するティン・トゥーミーとオーツェルによる「文化に基づいた状況モデル」は、4つの要因群で構成されている。(a)一次指向要因：文化的価値様式、個人的属性、コンフリクト規範、面子への関心 (face concerns)、(b)状況および関係性 (relationship) の境界特徴：集団間の境界、関係性パラメーター、コンフリクト目標評価、コンフリクト強度、(c)コンフリクト・コミュニケーション過程要因：コンフリクト・スタイル、フェイスワーク (facework) 方略、感情表現、コンフリクト・リズム、(d)コンフリクト管理・解決能力の特

徴。1) で概観したように、アントーニオとシャイロックは全く対立しているように見える。この二人の異文化コンフリクトには、どのような特徴があるのか、どのような違いがあるのかを分析していく。以下では、アントーニオはA、シャイロックはSと略号を用いる。

#### (a) 一次指向要因

文化価値様式：個人主義 - 集合主義、権力格差など。

・AとSは、ともに基本的に個人主義的である。(ただし、言うまでもなく、状況による。AもSも、自分の属する集団の利益や秩序を重視する場合もある。支配集団に属するAは個人主義的でいられるが、被差別集団に属するSは社会的弱者であり、例えば娘ジェシカがキリスト教徒の男性と駆け落ち結婚するように、同化や抹殺による民族集団の消滅の不安があるために、時に個人の欲望や欲求よりも集団のアイデンティティを重視する集合主義的傾向を見せることがある。Aもまた、キリスト教徒集団の代表として集合主義的になることもある。) 権力格差については、時代の制約があり、分析外とする。

個人的属性：独立した自我感(a sense of self)をもつか相互依存した自我感をもつか。(個人主義 - 集合主義と基本的に相関関係にある。)

・AとSは、ともに強い独立した自我感をもっている。

コンフリクト規範：公正(equity)規範を使うか共同体規範(communal norm)を使うか。(共同体規範は、集合主義者たちが集団内コンフリクトで和を保つために使う傾向がある。)

・AとSは、ともに公正規範の使用を好む。

面子への関心(face concerns)：面子は、敬意、名誉、地位、評判、信望、能力、ネットワーク・コネクション、人間関係の義務などに関わる。自己 - 面子、他者 - 面子、相互面子の3次元がある。面子は、今も昔も、東洋だけでなく西洋文化でも重要である。

・AとSは、ともに自己 - 面子を重視する。

#### (b) 状況的・関係性境界特徴

集団内 - 集団外知覚境界：「我々と彼ら」。自民族中心主義や偏見が強く作用する。

・AとSは、ともに境界が強い。

関係性(relationship)パラメーター：競合 - 協調、連携(affiliation) - 支配

(control)、信頼 - 不信。コンフリクトがどういう枠組みで行われているかを理解することが重要である。

・AとSの関係性は競合(competition)、支配、不信である。

(1) コンフリクト目標評価：内容、関係性、アイデンティティ。(例えば、一方は仕事の結果を求め、他方は人間関係や会社の関係を強化することをめざす場合、「仕事」対「関係性」という目標評価の対立が生じる。)

(2) 内容・コンフリクト目標：分析外とする。

(3) 関係性・コンフリクト目標：非親密 - 親密、公式 - 非公式(うちとけた)など。

・AとSは、ともに互いを敵と見なしている。

アイデンティティに基づいた目標：係争点は、コンフリクトの当事者たちが相手のアイデンティティをどう見なすか。正当化(validation) - 拒絶、是認 - 否認、尊敬 - 軽蔑、評価 - 否定(disconfirming)など。

・AがSのユダヤ教徒の金貸しというアイデンティティを拒絶、否認、軽蔑し、人格、職業、宗教まですべてを否定する。Sは自己の正当化、是認、(尊敬は別にして)評価を求めるが、受け入れられないので、Aのキリスト教徒としての生き方を拒絶、否認、軽蔑、否定する。芝居の状況で多少変化するが、アイデンティティがコンフリクトの最重要な係争点である。

コンフリクト強度とリソース：コンフリクトの強度の強弱。リソースは当事者がコンフリクトの中でめざす報酬(見返り、報い)で、有形のもの(例、金銭、昇進、昇給)と無形のもの(例、深い欲望、つながり・尊敬・支配などを含めた心理的・感情的安全のような欲求)がある。

・AとSは、ともにコンフリクトの強度が非常に強い。Aは、有形リソースとして、船上の財産(船が難破したという報告後は自分の身体?)、無形リソースとして信用を守りをめざす。Sは、有形リソースとして「肉1ポンド」の獲得、無形リソースとして深い欲望(復讐)を満たすことをめざしている。

### (c) 異文化コンフリクト・コミュニケーション：過程要因

コンフリクト相互作用スタイル：代表的な5つのスタイルは、威圧する(競合する、支配する)、回避する、義務を迫らせる(強制的にやらせる)、妥協する、統合する。(注：これらのスタイルは、欧米とアジアで受けとめ方が違う。)

・AとSは、ともに競合するスタイルを用いる。

「文化に基づいた状況モデル」では、5つのスタイルでは不十分だとして、

他に3つのスタイル（感情表現、第三者の助け、無視）を付加する。

(1) 感情表現：コンフリクトの間、コミュニケーション行動を管理するために感情をどう使うか。感情表現をはっきり使うか、抑制するかなど。

・AとSは、芝居の前半ではともに感情表現を明示する。裁判の場面（判決前まで）ではAは感情を抑制気味である。（感情表現の仕方は、言うまでもなく、演出や俳優の演技に左右される。）

(2) 第三者の助け：コンフリクトを調停するために部外者を使うかどうか。

・Sは裁判に訴える。

(3) 無視：分析外とする。

コンフリクト・フェイスワーク行動：「フェイスワーク」とは、自分の面子と他者の面子をたてたり、支持したり、挑戦したりために用いるコミュニケーション方略の組み合わせである（例えば、弁護する、謝罪する）。

・AとSは、ともに自己主張的である。Aは自己の文化と自分自身に自信と誇りがあり、その自信に基づく自己主張であり、Sは差別されているがゆえの自己主張と、自分の文化とアイデンティティに対する（傷つけられた）誇りに基づく自己主張である。

コンフリクト感情表現：文化的表示ルール：怒り、不安、恥、欲求不満、義憤、敵意などの攻撃的または否定的な感情的反応を表示することを規制する規範や決まりがある。

・AとSは、ともに敵意を明示する。（ただし、状況によって、感情を偽ったり、感情を抑制することもある。）

コンフリクト・リズム：Mタイム(monochronic time, 単一的時間)かPタイム(polychronic time, 多元的時間)を使うか。

・AとSは、ともにMタイムであり、コンフリクトを直線的に扱う。

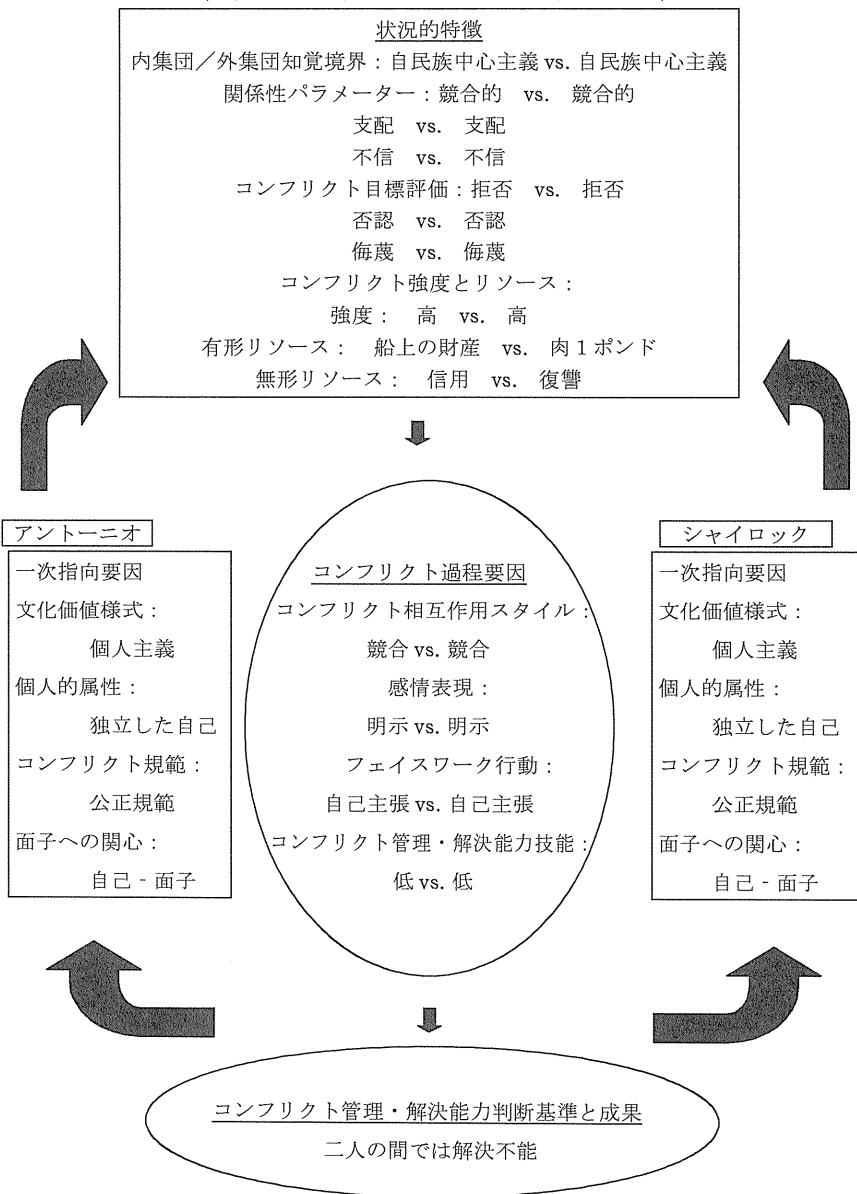
(d) 異文化コンフリクト管理・解決能力：4つの基準

適切性、有効性、満足、生産性の4つがある。

・AとSは、自力ではコンフリクトを解決できないので、分析外とする。

以上の分析の結果を図に示すと次のようになる（図1）。

図1：アントーニオとシャイロックの異文化コンフリクト  
(文化に基づく状況コンフリクト・モデルに準拠)



以上の分析と図から、アントーニオとシャイロックの異文化コンフリクトに関して、次のようなことがわかる。一次指向要因では、二人は、個人主義、独立した自己、公正規範、自己・面子の点で、同じような傾向を示している。状況的特徴では、自民族中心主義、競合的・支配・不信、拒否・否認・侮蔑、コンフリクト強度の高さの点で、同じような傾向を示している。コンフリクト過程要因では、競合的な相互作用スタイル、感情表現の明示、自己主張、コンフリクト管理能力技能の低さの点で、同じような傾向を示している。要するに、異なる文化に属する者同士が、相互の境界を非常に強く意識して対立し、多くの点で同じような傾向を示して衝突するので、当事者二人の間ではコンフリクトを解決できないのである。

この結論自体は驚くべきものではない。しかし、「文化に基づいた状況モデル」に準拠して、アントーニオとシャイロックの異文化コンフリクトを多角的に分析することにより、通常の文学・文化研究の方法ではおそらく盲点になっていたことが、明らかになる。

両者のコンフリクトが解決不能になる根本的理由は、宗教的・民族的な差異にあるという通説は、完全に正しいとは言えないのである。もちろん、今日でも異文化コンフリクトの重大な原因のひとつは、異文化や異民族集団に向けられた憎悪である。世界各地で起こっているコンフリクトの特定の原因は状況によって異なるが、こうした事件では、「対極的なコミュニケーション(polarized communication)」、すなわち『我々』が正しくて、『彼ら』が心得違いをしているかまちがっている<sup>8</sup>と考える傾向があると言われる<sup>8</sup>。『ヴェニスの商人』のアントーニオとシャイロックの相互作用は、それぞれが自民族中心主義に立脚し、対極的なコミュニケーションの典型である。さらに、異文化に属する者同士のコンフリクトは、しばしば制御できないものになる。コンフリクトは一度始めると、特に関係者間に以前からの問題がある場合は、永続する傾向がある<sup>9</sup>。ユダヤ教徒とキリスト教徒のコンフリクトでは、特定の個人間のものであっても、背景にきわめて長くて深刻な歴史的問題(迫害、差別、ディアスポラ等)があるので、制御不能の、手におえないものになりやすい。このように考えると、アントーニオとシャイロックのコンフリクトは、芝居の最初から解決不能になるように予め決定されていた——仕組まれていた——ように思われ

<sup>8</sup> Gudykunst and Kim 295 参照。

<sup>9</sup> Gudykunst and Kim 297 参照。

る。

しかし、本論では、異文化コンフリクトの管理・解決には、コンフリクトの枠組みを理解することが重要であるとわかった（関係性パラメーター）。アントーニオとシャイロックの関係性は、競合（competition）、支配、不信である。この関係性が、コンフリクトを解決不能に至らせるより直接の状況的な要因なのである。さらに、この競合的な枠組みに連動して、コンフリクト目標評価、コンフリクト強度なども、相互に否定的な態度を示し、激しく衝突することになる。シャイロックの娘ジェシカとキリスト教徒のロレンゾーが相思相愛になるように、異文化の者同士が協調することも固い絆で結ばれることもある。アントーニオとシャイロックの場合、二人が激しく競合するために、勝つか負けるかの全面的な対決になるのである。なお、慎重に考察すべき事項だが、この二人のコンフリクトの場合、初期段階では、地位や権力の点で優位に立っているアントーニオの方が「罪深い」と言えるかもしれない。彼は、シャイロックを、個人としてよりも、ユダヤ人の金貸し（高利貸し）というカテゴリーに分類し、憎悪するからである。しかし、シャイロックもまた最初から復讐心に燃え、殺意すら抱くので、弁護することもできない。

さらに注目すべきことがある。二人の間には非常に共通点が多いことである。この事実は、二人の関係性が協調的なものであれば積極的に作用しえるが、関係性が競合的なものなので、逆にきわめて否定的に作用し、全面対決となり、コンフリクトを解決不能に至らせるのである。この解決不能のコンフリクトがどのように「解決」されているかを次のセクションで検討することにする。

### 3. 異文化コンフリクトはどのように「解決」されたのか？

ここでは、法学博士バルザザーに変装した裁判官ポーシャの判決（4幕1場 295-）からシャイロックの退場（4幕1場 397）までに焦点をあわせる。有名な慈悲のスピーチ（4幕1場 180-201）で、ポーシャは慈悲の必要を説くが、シャイロックが証文どおりの正義を主張して譲らない。そこで、彼女はシャイロックの言い分を認める判決を言い渡す（4幕1場 295-96）。シャイロックが大喜びしてアントーニオに覚悟を迫ると、ポーシャは、シャイロックの言う「正義」に立脚し、証文どおりの肉1ポンド以外1滴の血でも流せば、全財産没収および死刑に処する、とさらに判決を言い渡す（4幕1場 301-308）。ついにシャイロックは、バッサーニオが提供する金を受けとり、肉1ポンドの抵当は断念しようとするが、ポーシャはさらに追いつめる。とうとう怒って退廷しよ



うとするシャイロックを、彼女は引きとめて言う。

Tarry, Jew:

The law hath yet another hold on you.  
It is enacted in the laws of Venice,  
If it be proved against an alien  
That by direct or indirect attempts  
He seek the life of any citizen,  
The party 'gaint the which he doth contrive  
Shall seize one half his goods, the other half  
Comes to the privy coffer of the state,  
And the offender's life lies in the mercy  
Of the Duke only, 'gainst all other voice.  
In which predicament I say thou stand'st;  
For it appears by manifest proceeding  
That indirectly, and directly too,  
Thou hast contrived against the very life  
Of the defendant, and thou hast incurred  
The danger formerly by me rehearsed.  
Down, therefore, and beg mercy of the Duke. (4.1.342-59)

(待て、ユダヤ人、／法律によりまだおまえは退出できない。／ヴェニスの国法は次のように定めている、／異邦人が、／直接的にせよ、間接的にせよ、／ヴェニス市民の生命を奪おうとしたことが立証された場合、／異邦人に陰謀を企てられた相手側は／その財産の半分を所有し、残りの半分は／国庫に収めるものとする、／犯人の生命は、公爵の裁量にのみ委ねられ、何人も抗議することはできない。／いいか、おまえはこのような窮地にたっているだ。／なぜなら、明白な行為によって、／直接的にも、間接的にも／おまえは、被告の生命を奪おうとしたことが明らかであり、／おまえは、今私が読み上げた刑罰を／みずから招いたのだ。／この上は、ひざまずいて、公爵のお慈悲を乞うがよい。)

シャイロックは、ヴェニスにおいて一定の条件のもとで商売を営むことも訴訟を含めて相当の法律上の権利を有することも認められているが、所詮は、ユダ

ヤ人として“an alien”（異邦人、部外者、非・市民）という地位・身分に位置づけられている。ヴェニス市民の生命を奪おうとした犯人が異邦人である場合は、殺人未遂でも全財産没収（被害者と国家で折半）、公爵の裁量にかかるとはいえ死刑もありうるという、きわめて差別的な法律に基いて、シャイロックは裁かれるのである。彼は公爵の裁量で生命は助けられ、アントーニオの計らいで財産半分の国庫への没収をまぬかれる。ただし、アントーニオの提案で、即刻キリスト教に改宗すること、残りの財産はアントーニオの管理下に置かれ、将来娘夫婦に譲渡する旨の証文を作ることが定められる。シャイロックは悄然と同意して、退場する。

この芝居の裁判は奇妙な展開をする。当初は、借金の返済をめぐる民事裁判のようなもの（被告：アントーニオ、原告：シャイロック）であり、シャイロックが一瞬勝訴する。ところが、その直後、法廷は殺人未遂事件の刑事裁判のようなもの（被告：シャイロック、被害者：アントーニオ）にまさに劇的に変容し、アントーニオとシャイロックの立場が逆転し、今度は犯人としてシャイロックが告発され、判決が下される。しかも、刑罰はそのまま科されるわけではなく、公爵やアントーニオが権利を放棄したり、一方的に条件をつけて刑罰の内容を変更したりする。つまり、刑事事件の判決後は再び民事事件的なものに戻り、妥協・和解案のようなものが探られている。（恋愛喜劇中の架空の法廷を厳密に検討しても限界があるが、成り行きに不可解な点が残るのである。）

この裁判が奇妙な展開をする主要原因は、裁判官ポーシャの言動にある。彼女は、実は、この法廷に到着した時点ですでに、シャイロックが起している裁判沙汰が犯罪的なものであると明白に認識しているにもかかわらず、その事実を隠している。そして、当初は民事事件のようなものとして対処し、アントーニオとシャイロックの紛争を調停しようとする。それが首尾よくいかないと、法律だけに拘束された裁判官の態度を装い、シャイロックの訴訟内容を認め、肉1ポンドをとることを認める。その直後に、態度を豹変させて、それが外国人によるヴェニス市民に対する殺人未遂事件であると告発して、シャイロックに厳格な刑罰を言い渡すのである。

なぜ裁判官ポーシャが最初に「真相」を隠すのかと言えば、それによってユダヤ人シャイロックに大きな打撃を与えることができるからである。つまり、この裁判全体が、最初から、キリスト教徒（集団）とユダヤ教徒の異文化コンフリクトの変奏なのである。したがって、判決以後に焦点をあわせつつ、この裁判を異文化コンフリクト管理・解決理論の視点から検討することにしたい。

「文化に基づいた状況モデル」によれば異文化コンフリクト管理・解決能力には、4つの基準がある。適切性、有効性、満足、生産性である。適切なコンフリクト行動は、コンフリクトを支配している基本的な価値、規範、社会ルール、期待、スクリプト（手続き）を理解することを通して評価される。有効性とは、当事者たちがコンフリクトの多数の意味に正確に耳を傾け、互いに望ましい目標を達成したかどうかである。コンフリクト相互作用を満足のいくものにするためには、コンフリクト交渉過程自体で交換されるメッセージの使用法をとりまく文化的前提を理解する必要がある。生産性とは、コンフリクトの問題を解決するための新しい概念、新しい計画、新しい弾み(momentum)、新しい方向の産出など、成果の諸要素に密接に関係する。生産的なコンフリクトでは、双方がコンフリクト過程に互いに影響を及ぼしたと感じ、双方がコンフリクトの結果として何かを得たと考える。非生産的なコンフリクトの議論がコンフリクトに対して「勝 - 負」（から「負 - 負」）指向を反映しているのに対して、生産的なコンフリクトの議論は「勝 - 勝」指向を反映している（図2）<sup>10</sup>。

図2 &lt;勝 - 負&gt;対&lt;勝 - 勝&gt;コンフリクト指向：中心的特徴

<勝 - 負>コンフリクト指向	<勝 - 勝>コンフリクト指向
文化的差異の無視	文化的差異の尊重
アイデンティティの格下げ	アイデンティティの評価
<勝 - 負>から<負 - 負>の態度	<勝 - 勝>の協調的態度
コンフリクトのコンテキストに鈍感	コンフリクトのコンテキストに敏感
自己利益になるコンフリクト目標の押しつけ	相互利益になるコンフリクト目標の発見
自己利益になるコンフリクトの立場の主張と弁護	より深いコンフリクトの必要と前提の発見
競争的または受動的 - 攻撃的なコンフリクトの行動様式	協調的またはギヴ・アンド・テイクの妥協的な行動様式
気配りに欠けた態度に専念	気配りのあるコンフリクト管理・解決技能の実践
コンフリクト姿勢の堅持	進んで変えようという姿勢

<sup>10</sup> Ting-Toomey and John G. Oetzel 57-61 参照。

異文化コンフリクト管理・解決能力のある者とは、コンフリクトの意味を適切に、効果的に管理し、同時に、そのコンフリクトの関係性をより高度の満足と生産性のあるものに変容させることができる者のことである。

「文化に基づいた状況モデル」に準拠して裁判の場面を検討すると、まず、刑事裁判自体が、基本的に、ポーシャ（を代表とする）キリスト教徒とユダヤ人シャイロックの「勝 - 負」コンフリクト指向の枠組みに置かれている。より正確に言えば、シャイロックの方も、キリスト教徒の価値を尊重する態度は示さず、言葉は少ないものの敵対したままであるとはいえ、今度の状況では彼は殺人未遂犯として決定的に不利な立場に立たされているので、優位に立ったキリスト教徒側の「勝 - 負」指向の特徴が前面にでる。つまり、自文化中心主義に立脚し、ユダヤ人のアイデンティティを格下げし、自己利益になる目標を押しつけ、自己利益になる立場を主張し、競合的な行動様式をとり、気配りに欠け、対決姿勢を堅持する。さらに、この裁判自体が公正かつ中立ではなく、その法的枠組みがキリスト教徒側に偏向している。

しかも、裁判官ポーシャは、シャイロックの求める以上の正義（厳罰）を科するという報復主義の姿勢をとるのである。演劇的にはどんでん返しの見せ場になっているが、ポーシャは、策略を用いている<sup>11</sup>。彼女は最初は公正かつ中立な裁判官のふりをして、シャイロックの信頼を得るが、判決直後から彼をだしぬく。（シェイクスピアの喜劇に多い機知縦横のヒロインは、しばしば「策略家」であり、ここもポーシャの策略家としての面目躍如たるところである。）ポーシャが、最初から、シャイロックに証文には肉1ポンドだけで血が言及されていないことなどの情報を伝えていれば、彼は早い段階で復讐を断念したか、断念せざるをえなかっただろう。復讐の代わりにバッサーニオの提供する金を受けとっていれば、アントーニオは救われたし、シャイロックも最低でも貸した元金はとりもどし、コンフリクトはもう少し穏便に解決される道はあっただろう。

ポーシャの判決後、キリスト教徒の慈悲心を見せつけるという動機に基づい

<sup>11</sup> ちなみに、オーガスチンとエーデルマンは、民族差別問題を棚上げして、ポーシャの「危機管理能力」を賞賛している。オーガスチン&エーデルマン著、仁平和夫訳『最高経営責任者シェイクスピア』（白水社、2001）。原著は、Norman Augustine and Kenneth Adelman, *Shakespeare in Charge* (Hyperion, 1999)。邦訳は「古典に学ぶリーダーの掟」と表紙カバーに説明されているが、内容に一致している。シェイクスピア専門家の立場からは疑問点が多いとはいえ、シェイクスピアの作品がビジネス・スクールで活用されているという事実は意義深い。

て、公爵やアントーニオのとりなしがある。形式的には、彼らの行動は、自分は損をして相手に利益を与えるように見えるが、そもそも異邦人の場合は殺人未遂でも全財産没収および死刑という不当な法律に基づく判決であるから、厳密には、慈悲とも温情とも言えない。アントーニオの提案、とりわけシャイロックの改宗の強制は重大である。(当時、キリスト教徒の考えではユダヤ教徒は死後地獄に落ちるので、改宗によって救済への道が開かれたと言えるとしても、あるいはユダヤ人がキリスト教ヨーロッパの中で生き延びるために加別の事情で進んで改宗した例が多数あったとしても、改宗の強制は今日の観客には非常に抵抗のある行為である。) アントーニオは、文化的差異を無視するどころか否定し、アイデンティティも否定して、キリスト教的信仰と価値を押しつける。しかも、アントーニオの提案に、ポーシャ、公爵、バッサーニオ、他のキリスト教徒の登場人物のだれ一人として反対しないどころか、むしろ積極的に支持している。ヴェニスの主流集団から見ると、この異文化コンフリクトでは、キリスト教社会の法と秩序を守ることが至上目標となる。すべてにおいて、アントーニオ個人の利益とは言わずとも、ヴェニスのキリスト教徒集団の利益が最優先される。彼は、気配りのあるコンフリクト管理・解決技能を実践するように見えるかもしれないが、本当は違う。シャイロックのアイデンティティの基盤である信仰は奪う代わりに、財産は生きている間は実質的に戻してやるというように、妥協的な行動様式をとるように見えるかもしれないが、基本的に相手を最も核心的なところで否定し、攻撃している。あくまで競合的な姿勢を堅持していると言わざるをえない。

『ヴェニスの商人』におけるアントーニオとシャイロックの異文化コンフリクトは、シャイロックが、裁判の判決を受け入れる——受け入れざるをえない——という意味では、形式的に「解決」している。しかし、きわめて後味の悪い判決であり、「解決」である。アントーニオとシャイロックの異文化コンフリクトは、二人の関係性が競合的なものであるために、当事者間では解決できなかった。しかし、裁判の場面でも状況は同じである。キリスト教徒集団とシャイロックの関係性は、競合的である。後者の場合のコンフリクトがなぜ「解決」されるかと言えば、ヴェニスの支配集団であるキリスト教徒たちが、異教徒に対して強権を発動するからにはほかならない。この裁判による「解決」は、キリスト教徒にとって、適切、有効であり、満足がいき、生産的ですらあるかもしれないが、双方にとって望ましい満足のいく解決ではない。異文化コンフリクト管理・解決能力の判断基準の適切性も有効性も、満足も生産性も、本当

の意味では、達成されてはいない。異文化コンフリクト管理・解決の見地からは、どれほど歴史的条件を勘案しても——民族相対主義の理念を求めることに限界があるとしても——、たとえ喜劇全体は約束どおりハッピー・エンドで終るとしても、作品の中心に「腹黒い術策 (black arts)」——暴力——を抱え込んでいるのである<sup>12</sup>。

### III. 結論

本論では、『ヴェニスの商人』のアントーニオとシャイロックの間に起こる深刻な異文化コンフリクトを対象とし、「文化に基づいた状況モデル」に準拠し、コンフリクト管理・解決を多角的に分析した。アントーニオとシャイロックは、互いの差異を非常に強く意識して衝突するために、当事者間ではコンフリクトを解決することができない。しかし、宗教的・民族的差異がそのまま深刻なコンフリクトに直結するとは限らず、彼らの競合的な関係性という枠組みが、コンフリクトを解決不能に至らせるより直接の状況的な要因であることが明らかになった。次に、4幕1場の裁判（特に判決後の経緯）を検討した。この裁判全体が、キリスト教徒（集団）とユダヤ教徒の異文化コンフリクトの変奏なのであり、その「解決」は、ヴェニスの支配集団であるキリスト教徒たちが、異教徒に対して強権を発動することによってもたらされているにすぎなかった。この芝居の裁判による「解決」に問題があることは周知の事実だが、本論ではコンフリクト管理・解決理論の視点から検討しなおし、キリスト教徒側の自文化中心主義を多角的に明らかにした。以上から、コンフリクト管理・解決理論モデルによる分析は有効であったと言える<sup>13</sup>。さらに、異文化コンフリクト管理・解決理論と実践は非常に今日的意義をもっているが、それを応用することにより、シェイクスピアの作品がこの分野に資する潜在的可能性や意義

<sup>12</sup> コンフリクト解決理論には、「腹黒い術策 (black arts)」と称されるものがある。例えば、「暴力、強制・威圧、威嚇、詐欺・詐術、恐喝、誘惑」などである。これらが行使された場合、望ましい解決とは見なされない。Deutsch and Coleman, eds. xiii 参照。さらに、かつて白豪主義のオーストラリアを批判するときに言われた、「白いオーストラリアは黒い」を想起して、ポストコロニアル批評の観点から、この芝居のヴェニスの白人キリスト教徒たちは黒い、と言うこともできるだろう。

<sup>13</sup> この芝居全体の構造を理解するためには、もちろん、もうひとつの主要コンフリクト——ポーシャとバッサーニオ、ネリッサとグラシアーノという二組の新婚夫婦間の指輪をめぐるもの——をとりあげ、協調的なコンフリクト管理や「勝・勝」コンフリクト指向を分析する必要がある。

が明らかになったと言える。

ここで、本論で集中的に議論することができなかった差異と同一性の問題について考察を加えておきたい。差異と同一性は、シェイクスピア研究と異文化コミュニケーション研究の接合をめざす立場から、特に重要なテーマだからである。異文化コミュニケーションは、元来、差異を前提とし、差異から生じる誤解やコンフリクトをいかに管理・解決するか、いかに効果的コミュニケーションを行って相互理解に達するかを、理論的かつ実践的に追究している。ここでめざされている理解に達するには、「自分たちの現実と常識と他の諸文化出身の者たちの現実と常識は根本的に異なるが、説明されうる」と信じること、「価値は、他の意味が創造され継承される同一の過程をとおして創造され継承されると認識する」ことが必要である<sup>14</sup>。差異を強調しすぎても低く見積もっても、相互に違うと思ひ込みすぎても同じようなものだと思ひ込んでならない。諸文化は異なるのだが、それぞれの文化や価値の違い自体は同じ過程をとおして形成されると認識することが肝要である。『ヴェニスの商人』で敵対するアントーニオとシャイロックの間には、非常に共通点が多く、二人の関係性が協調的なものであれば積極的に作用しえるが、関係性が競合的なものなので、逆にきわめて否定的に作用し、全面対決となり、コンフリクトを解決不能に至らせると指摘した（本論2）の結論部参照）。ユダヤ教徒とキリスト教徒の間には、宗教的・民族的差異を超える共通性がいくつもあるのだ。アントーニオとシャイロックが互いの共通性を理解し尊重しあうことができれば、理論的にはコンフリクトはこれほど深刻なものになることはなかったはずである<sup>15</sup>。

最後に、シェイクスピア研究と異文化コミュニケーション研究を接合するプロジェクトの一環として、本論では、異文化コンフリクト管理・解決理論のモ

<sup>14</sup> Paul Kimmel, "Culture and Conflict," in Deutsch and Coleman, eds. 462.

<sup>15</sup> 『ヴェニスの商人』における異文化コンフリクトを双方に満足のいく形で解決する方法を考えることはむだな営みではない。作品の理解を深めるためには直接役立たないかもしれないが、異文化コミュニケーション教育や、異文化理解教育を意識した教育や上演のためには役立つだろう。この芝居自体の中で望むには限界があるとしても、一般論を述べると、ユダヤ人とキリスト教徒とのコンフリクトを解決するためには、双方が先入主をもち自文化中心の傾向があることを謙虚に認め、そうした傾向が同じ過程や必要によって生じていることを認めあい、理解しようと努める必要がある。深刻な経済的利害の衝突など他の要因があれば、そうした態度だけでコンフリクトが解決する保障はないが、解決に向かう第一歩とはなる。勝つか負けるかの競合的な態度からは双方が満足する結果は決して得られず、協調的な態度をとることが求められる。このようなことをあえて述べるのは、シェイクスピアと異文化コミュニケーションの接合は、シェイクスピアの作品をとおして異文化理解教育にも資するはずだからである。

デルを適用し、一定の成果をあげることができた。しかし、今後まだ多くの課題が残されている。『ヴェニスの商人』に関して言えば、シェイクスピア研究の分野では、ユダヤ人についての研究が盛んに行われている<sup>16</sup>。この成果を異文化コミュニケーション研究の一環である異文化交流で待望されている、通時の研究に結びつけることは有益であろう。『ヴェニスの商人』は今日、日本を含めた世界のさまざまな地域で、さまざまな言語で、さまざまな俳優によって上演され、その過程で欧米中心的な文化や価値がローカルな文化に影響を及ぼすと同時に、欧米中心的文化や価値も変容をとげるという相互作用が起こっている。こうした上演や翻訳の研究も非常に期待される。さまざまな試みをとおして、シェイクスピアと異文化コミュニケーションの接合の名に真に値する複合研究に、なおいっそう発展させねばならないだろう。

---

<sup>16</sup> 必読の基本文献として、以下の1冊だけあげておく。James Shapiro, *Shakespeare and the Jews* (New York: Columbia UP, 1996).